

## 第 2 部 実証的検討

## 第7章 友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係

第7章においては、友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係を中心に検討を行う。特に、Dweck & Leggett (1988) の理論通り、経験・成長目標は抑うつ傾向と負の関係を示し、評価一回避目標は抑うつ傾向と正の関係を示すが、Dweck & Leggett の理論に反して、評価一接近目標は抑うつ傾向と負の関係を示すであろうという仮説を検討する。

第7章の構成は次の通りである。まず、第1節において、友人関係における目標志向性（経験・成長目標、評価一接近目標、評価一回避目標）を測定できる尺度を開発する（研究1）。

次に、第2節で、研究1で作成された尺度を用いて、3つの目標と抑うつ傾向との関係についての本研究の仮説を検討する（研究2）。3つの目標と抑うつ傾向との関係については、学年、男女を込みにした検討（研究2-1）の他に、両者の関係に発達差・性差があるかどうか検討するために、学年別、男女別の検討も行う（研究2-2）。

続く第3節において、Dweck & Leggett (1988) の理論で仮定されている、友人関係における目標志向性と自尊心との相互作用が抑うつ傾向に与える影響について検討する（研究3）。

さらに、第4節において、友人関係における目標志向性と他の抑うつ傾向の素因とで、どちらが抑うつ傾向の予測力が高いかを比較する（研究4）。他の抑うつ傾向の素因としては、抑うつ傾向の重要な素因の1つであり、小・中学生を対象とした先行研究において検討されることの多い、原因帰属スタイルを取り上げる。

最後に、第5節において、以上の4つの研究の結果を要約する。

## 第1節 友人関係における目標志向性尺度の作成 [研究1]

### 目的

先行研究を概観すると、学業領域における目標志向性尺度はいくつか作成されているが、友人関係における目標志向性尺度は作成されていない。

そこで本研究では、友人関係における経験・成長目標、評価一接近目標、評価一回避目標を測定できる尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討する。

信頼性の指標としては、 $\alpha$ 係数と再検査信頼性係数を求め、尺度の内的一貫性と安定性を検討する。

また、構成概念妥当性を検討するために、公的自己意識、自尊心、賞賛獲得欲求、関係回避欲求、否定的評価懸念との関係を検討する。3つの目標と各構成概念との予測される関係は、以下の通りである。

**公的自己意識との関係：**評価一回避目標及び評価一接近目標の高い者は、共に友人からの評価に強い関心を示すため、高い公的自己意識をもつであろう。

**自尊心との関係：**経験・成長目標の高い者は、友人関係における経験を自己成長につなげようとするため、高い自尊心を示すであろう。また、評価一接近目標の高い者は、特に自分の性格についての友人からの良い評価に敏感になるため、高い自尊心を持つと予測される。一方、評価一回避目標の高い者は、特に自分の性格についての友人からの悪い評価に敏感になるため、低い自尊心を持つであろう。

**賞賛獲得欲求との関係：**自分の性格について良い評価を得ようとする評価一接近目標の高い者は、他者からの賞賛を獲得しようとする欲求も

強いと予測される。

**関係回避欲求との関係：**自分の性格について悪い評価を避けようとする評価一回避目標の高い者は、他者から否定的に評価されないようできるだけ他者とのネガティブな関わりを避けようとする、つまり、関係回避欲求が高いと予測される。一方、積極的に他者に働きかけ対人経験を獲得していこうとする経験・成長目標の高い者は、ネガティブな関係を回避しようとする欲求が低いと予測される。

**否定的評価懸念との関係：**自分の性格についての悪い評価を避けようとする評価一回避目標が高いと、友人からの悪い評価を気にかける、つまり、否定的評価懸念が高くなると予測される。

## 方法

**被調査者** 栃木県内の公立 A 中学校の 1 年生 99 名（男子 40 名，女子 58 名，不明 1 名），2 年生 114 名（男子 52 名，女子 61 名，不明 1 名），合計 213 名であった。また，再検査信頼性を検討するために，上記の中学生から，1 年生 87 名（男子 52 名，女子 34 名，不明 1 名），2 年生 34 名（男子 17 名，女子 17 名）の合計 121 名（男子 69 名，女子 51 名，不明 1 名）に対して，約 1 カ月半の期間を空けて，再度友人関係における目標志向性尺度を実施した。なお，関係回避欲求尺度を用いた検討に関しては，別の公立 B 中学校の 1 年生 98 名（男子 44 名，女子 54 名）が，否定的評価懸念尺度を用いた検討に関しては，公立 C 中学校の 1 年生 100 名（男子 46 名，女子 54 名）が，それぞれ対象となった。

**調査時期** 1999 年 7 月中旬，及び，9 月上旬。

**質問紙** 友人関係における目標志向性尺度：経験・成長目標，評価一接近目標，評価一回避目標を測定する尺度である。各目標の定義は以下の

通りである。

**経験・成長目標**：異なる考え方や性格をもつ友人と関わるという経験を重視し、その経験を通して自己成長を目指すこと。

**評価－接近目標**：友人関係において、自分の性格についての良い評価を得ようとする事。

**評価－回避目標**：友人関係において、自分の性格についての悪い評価を避けようとする事。

それぞれの目標の項目は、学業領域における目標志向性尺度 (Elliot & Church, 1997 ; Middleton & Midgley, 1997) なども参考にしながら、定義を反映するように以下の観点から作成された。まず、経験・成長目標に関しては、①友人関係の中で、自分とは異なった考え方や性格をもつ友人と関わってみるなどといった経験を重視する、②友人関係の中で自己の成長を目指そうとする、という観点から、10項目を作成した。次に、評価－接近目標については、①友人に自分の性格の良さを示そうとする、②友人から自分の性格について良く思われようとする、③友人より良い性格をもとうとする、という観点から11項目を作成した。評価－回避目標については、①自分の性格の悪い所を隠そうとする、②友人から自分の性格について悪く思われないようにする、③自分の性格の悪いところを指摘する友人を回避する、という観点から10項目を作成した。評定は、「まったくあてはまらない」(1点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「すこしあてはまる」(3点)、「とてもあてはまる」(4点)の4段階で求めた。

**公的自己意識尺度**：桜井 (1992) により作成された自己意識尺度の下位尺度を使用した。項目は、「自分の思ったことを、人がどう思うかどうか気になりますか」、「人が自分のことについて何か言っているととても

気になりますか」, など 10 項目で構成されている. 評定は, 「いいえ」(1 点), 「どちらかといえばいいえ」(2 点), 「どちらかといえばはい」(3 点), 「はい」(4 点) の 4 段階評定で, 得点が高い程, 公的自己意識が高いことを示す.

**自尊心尺度**: 海保・山下 (1968) と遠藤・安藤・冷川・井上 (1974) の自尊感情尺度から 12 項目を選択した簡易尺度を利用した. この尺度を因子分析した結果, 自己への不安因子(「自分がどんなふうに見られているか心配になりますか」(逆転項目) など 8 項目) と, 自己への自信因子(「自分で正しいと思ったことははっきり言いますか」, 「人に物事をまかせるよりも, 自分でやりたいようにやった方が良くと思いますか」 など 4 項目) に分かれたため, 本研究では, 後者の 4 項目を自尊心尺度として使用した. 評定は, 「いいえ」(1 点), 「どちらかといえばいいえ」(2 点), 「どちらかといえばはい」(3 点), 「はい」(4 点) の 4 段階評定で, 得点が高い程自尊心が高いことを示す.

**賞賛獲得欲求尺度**: 菅原 (1986) により作成された尺度を使用した. 「みんなの注目を浴びたい」, 「みんなの人気者になりたい」 など, 5 項目で構成されている. 評定は, 「まったくあてはまらない」(1 点), 「あまりあてはまらない」(2 点), 「すこしあてはまる」(3 点), 「とてもあてはまる」(4 点) の 4 段階評定で, 得点が高い程, 当該の欲求が強いことを表す.

**関係回避欲求尺度**: 渡部 (1999) による対人欲求尺度の下位尺度である回避尺度から, 因子負荷量の低い (.40 未満の) 項目を除いた 5 項目を用いた. 具体的な項目は, 「一緒にどこかに行こうと誘って断られたら, もう一度誘ってみる気にならない」, 「人からの拒否や批判を避けるためには, たとえ人とあまり関わることができなくなってもしょうがない」,

などである。評定は、「まったくあてはまらない」(1点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「どちらともいえない」(3点)、「すこしあてはまる」(4点)、「とてもあてはまる」(5点)の5段階評定で、得点が高い程、当該の欲求が強いことを示す。

否定的評価懸念尺度：松尾・新井(1998)により作成された対人不安尺度の下位尺度を、一部表現を変えて使用した\*。「友だちが自分について悪口を言っていないか、気になります」、「人がたくさんいるところでは、自分がいやな人と思われないか、気になります」、など7項目で構成されている。評定は、「まったくあてはまらない」(1点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「すこしあてはまる」(3点)、「とてもあてはまる」(4点)の4段階評定で、得点が高い程、否定的評価懸念が強いことを表す。

手続き 担任教師によってクラス毎に集団で実施された。

## 結果と考察

まず、友人関係における目標志向性尺度に対して、因子分析を行った。初期解を主成分解で求め、3因子を抽出し、バリマックス回転を施した。2つの因子に.35以上の負荷量を示した6つの項目を除いて\*\*再度同様の因子分析を行った結果と、各項目の平均値及び標準偏差を、Table 7

---

\* 調査対象の中学校からの要請を受けて、「自分のことが嫌いな人が1人でもいることはこわいことです」「みんなに笑われるのはこわいです」の下線部が、それぞれ「不安になります」「不安です」に変更された。

\*\* 評価回避目標用の2項目(「自分の性格について、友だちから悪く思われないようにしています」、「友だちから『いやな人だ』と言われることだけはさげたいです」と、評価接近目標用の4項目(「自分がよい人であることを友だちに示そうとしています」、「友だちに自分の性格の良い所をみせようとしています」、「自分のことを好人物と考えてくれる人と友だちになりたいです」、「自分の性格の良いところを友だちにみせたいです」)が削除された。

-1に示す。

第1因子は、「ちがう考え方をもち友だちとも知り合いになって、いろいろ話をしてみたいです」、「自分を深めるために、自分とは違った考え方を聞いてみることも大切です」など、経験・成長目標を測定するために作成された項目で構成されており、「経験・成長目標」と命名した。第2因子は、「自分の性格の悪い所を友だちにみられないようにしています」、「いつも、自分の性格について悪く言われるのをさけようとしています」など、評価一回避目標を測定するために作成された項目で構成されており、「評価一回避目標」と命名した。第3因子は、「『他の友だちよりも好感のもてる人である』といわれたいです」、「友だちに、自分が好人物であるという印象を与えたいです」など、評価一接近目標を測定するために作成された項目で構成されており、「評価一接近目標」と命名した。

Table 7-1 に示されている項目で下位尺度を構成し、下位尺度毎に  $\alpha$  係数と再検査信頼性係数を算出した (Table 7-2)。その結果、 $\alpha$  係数に関しては、経験・成長目標は.87、評価一回避目標は.87、評価一接近目標は.88であった。再検査信頼性係数に関しては、経験・成長目標が.67 ( $p < .01$ )、評価一回避目標が.73 ( $p < .01$ )、評価一接近目標が.76 ( $p < .01$ )であった。 $\alpha$  係数、再検査信頼性係数ともに十分な値であり、尺度の信頼性は確認されたといえよう。

また、下位尺度間の相関係数を算出したところ (Table 7-3)、評価一接近目標と評価一回避目標との間、及び、経験・成長目標と評価一接近目標との間に中程度の正の相関が示された (それぞれ、.55,  $p < .01$ ; .46,  $p < .01$ )。また、経験・成長目標と評価一回避目標との間に弱い正の相関が示された (.20,  $p < .01$ ) が、両目標が正の相関を示した評価一接近目



Table 7-1 友人関係における目標志向性尺度の因子分析結果と各項目の平均値(M)・標準偏差(SD)

	M	SD	因子			h <sup>2</sup>
			F1	F2	F3	
ちがう考え方をもち友だちとも知り合いになって、いろいろ話をしてみたいです。	2.90	.82	.80	.00	.15	.66
自分とは違った考え方をもち友だちの話しを、聞いてみたいと思います。	2.86	.76	.79	.00	.12	.63
経験 自分とは違った性格をもち友だちと付き合ってみることも、大切だと思います。	2.91	.77	.76	.12	-.01	.60
成 自分を深めるために、自分とは違った考え方を聞いてみることも大切です。	2.92	.74	.72	.01	.00	.53
長 友だちと言いきらそうとも良い経験になると思います。	2.68	.88	.64	.00	.00	.41
目 友だち関係の中で、自分を成長させていきたいと思います。	2.99	.79	.64	.16	.31	.52
標 友だち関係の中で自分がどれだけ成長していくか、楽しみです。	2.79	.82	.58	.20	.27	.45
友だちからどう思われているか気にして何もしないよりも、積極的に友だちに働きかけてみようと思います。	2.62	.81	.58	.00	.31	.43
友だち関係の中でいろいろな経験をしていきたいと思います。	3.08	.76	.57	-.01	.32	.43
友だちとけんかすることも、自分をみがく良いチャンスだと思います。	2.53	.92	.51	.00	.11	.27
自分の性格の悪い所を友だちにみられないようにしています。	2.35	.79	.14	.77	.22	.66
いつも、自分の性格について悪く言われるのをさげようとしています。	2.54	.82	.00	.75	.17	.59
評 友だちに悪い印象を与えることだけはさげたいと思います。	2.66	.82	.01	.72	.31	.62
価   自分の性格のいやなところをかくそうと努力しています。	2.35	.83	.16	.71	.16	.55
回 自分のいやなところを友だちに知られないよう努力しています。	2.41	.82	.01	.71	.24	.56
避 自分の性格のいやなところがでしてしまうような状況は、ぜっ	2.60	.84	.01	.68	.21	.51
目 たいにさげたいです。						
標 自分の性格を悪くいられないために、自分をきらっている友だちはさげたいです。	2.47	.87	-.01	.63	.00	.40
自分の性格について少しでも悪く言う友だちには近づかないようにしています。	2.21	.74	-.01	.59	.14	.37
評 「他の友だちよりも好感のもてる人である」といわれたいです。	2.74	.86	.15	.30	.81	.78
価 友だちに、自分が好人物であるという印象を与えたいです。	2.86	.78	.01	.16	.78	.64
他の友だちより好ましい人でありたいと思います。	2.77	.82	.12	.30	.74	.65
接 みんなから「よい人だ」と言われたいです。	2.91	.91	.18	.33	.73	.67
近 たくさんの友だちから好かれる性格をもちたいです。	3.33	.66	.18	.13	.71	.56
目 他のどの友だちよりも良い性格をもちたいと思います。	2.69	.83	.32	.33	.59	.56
標 自分が好感のもてる人であることを友だちにアピールすることがあります。	2.42	.77	.27	.16	.50	.35
		二乗和	4.77	4.43	4.20	13.40
		寄与率	19.10	17.70	16.79	53.58

注) F1:経験・成長目標, F2:評価—回避目標, F3:評価—接近目標.

Table 7-2 友人関係における目標志向性尺度の  $\alpha$  係数と再検査信頼性係数

	$\alpha$ 係数	再検査信頼性
経験・成長目標	.87	.67 **
評価一回避目標	.87	.73 **
評価一接近目標	.88	.76 **

注) \*\*  $p < .01$ .

Table 7-3 友人関係における目標志向性尺度の下位尺度間の相関

	経験・成長目標	評価一回避目標	評価一接近目標
経験・成長目標	—	.20 **	.46 **
評価一回避目標	-.07	—	.55 **
評価一接近目標	.42 **	.53 **	—

注)上段が相関係数, 下段が偏相関係数である. \*\*  $p < .01$ .  $N=213$ .

標の影響をコントロールして偏相関係数を求めてみると、 $-.07$  (*n. s.*)であった。従って、両目標はほぼ関係がないと考えられる。

最後に、目標志向性尺度の妥当性について検討する。まず、妥当性を検討するために用いた5つの尺度の平均値及び標準偏差を算出した (Table 7-4)。結果から、各尺度において極端な得点の偏りは認められなかった。

次に、目標志向性尺度と関連する尺度との相関係数を算出した。目標志向性尺度の3つの下位尺度の間に相関が示されたため、他の2つの下位尺度の影響をコントロールした偏相関係数を算出した。結果を Table 7-5 に示す。まず、公的自己意識に対しては、評価一回避目標及び評価一接近目標が正の相関を示した (それぞれ  $.42, p < .01$ ;  $.21, p < .01$ )。自尊心との関係では、経験・成長目標と評価一接近目標が正の相関 (どちらも  $.18, p < .05$ ) を、評価一回避目標が負の相関 ( $-.20, p < .05$ ) を示した。賞賛獲得欲求に関しては、評価一接近目標が高い正の相関 ( $.59, p < .01$ ) を示した。関係回避欲求とは、評価一回避目標が正の相関 ( $.41, p < .01$ ) を、経験・成長目標が有意傾向の負の相関 ( $-.20, p < .10$ ) を示した。そして、否定的評価懸念に関しては、評価一回避目標が正の相関 ( $.41, p < .01$ ) を示した。これらの結果は全て予測を支持するものであり、目標志向性尺度の構成概念妥当性が確認されたものと考えられる。

## 第2節 友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係 [研究2]

研究2では、「友人関係における目標志向性→抑うつ傾向」という関係を検討する。仮説は、以下の通りである。

Table 7-4 妥当性検討のために用いた尺度の  
 平均値(*M*)と標準偏差(*SD*)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
公的自己意識	26.81	6.36
自尊心	10.15	2.07
賞賛獲得欲求	12.68	3.40
関係回避欲求	12.43	4.63
否定的評価懸念	15.33	4.59

Table 7-5 友人関係における目標志向性尺度と関連する尺度との偏相関係数

	公的自己意識 (N=206)	自尊心 (N=206)	賞賛獲得欲求 (N=209)	関係回避欲求 (N=98)	否定的評価懸念 (N=100)
経験・成長目標	-.03	.18 *	.10	-.20 <sup>+</sup>	.04
評価・接近目標	.21 **	.18 *	.59 **	.03	.09
評価・回避目標	.42 **	-.20 *	.17 *	.41 **	.41 **

注) 被調査者の数は欠損値により異なる場合がある。 +  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .

(1) 経験・成長目標と抑うつ傾向との関係：経験・成長目標は、抑うつ傾向と負の関係を示すであろう。

(2) 評価－接近目標と抑うつ傾向との関係：評価－接近目標は、抑うつ傾向と負の関係を示すであろう。

(3) 評価－回避目標と抑うつ傾向との関係：評価－回避目標は、抑うつ傾向と正の関係を示すであろう。

まず、研究2－1において、学年・男女を込みにした検討を行う。次に、研究2－2において、学年・男女別の検討を行い、友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係に発達差・性差がみられるかどうかを検討する。

## 第1項 学年・男女を込みにした検討 [研究2－1]

### 目的

本研究では、学年・男女を込みにして、「友人関係における目標志向性→抑うつ傾向」という関係を、重回帰分析により検討する。

### 方法

**被調査者** 栃木県内の公立A中学校の1年生96名(男38名,女57名,不明1名),2年生107名(男48名,女57名,不明2名),合計203名。被調査者は研究1の公立A中学校の生徒と同じであった。

**調査時期** 1999年7月中旬。

**質問紙** 目標志向性尺度：研究1において作成された尺度を用いた。

抑うつ傾向尺度：海外においては、子どもの抑うつ傾向を測定する尺度としては、Children's Depression Inventory (Kovacs, 1983; 以下 CDI)

が頻繁に用いられている。CDI は、抑うつ感情、否定的な自己認知、意欲の低下など、主要な抑うつ症状を網羅した尺度であり、十分な内的妥当性を備えた、優れた尺度として評価されている (Kazdin, 1990 ; 高野, 1995)。CDI の日本語版は、桜井 (1995) により作成されており、高い信頼性と妥当性が検証されている。そこで、本研究では、桜井 (1995) による CDI の日本語版を利用した。桜井 (1995) による尺度は 27 項目で構成されているが、本研究では、自殺等の表現を含まず、項目一全体相関の高い 13 項目を利用した\*。被調査者は、抑うつ傾向を表す 1 組 3 つの文章 (例えば、「悲しいときもあった」、「何回も悲しかった」、「いつも悲しかった」; 合計 13 組) の中から、2 週間くらい前から今日までの間で、自分に最もあてはまるものを 1 つ選び、○をつけるようになっている。問いごとの抑うつ傾向得点は、3 つの文章の中で最も抑うつ傾向の程度の低いものが 1 点、次が 2 点、抑うつ傾向の程度の最も高いものが 3 点とされた。項目は、「いつも悲しかった」の他は、「いつもつらかった」、「いつも悩んでいた」、「どんなことでもうまくいかない」、「毎日、泣きたいような気分であった」(以上、最も高い抑うつ傾向を表す文章のみ) などであった\*\*。

手続き 担任教師によってクラス毎に集団で実施された。

## 結果と考察

まず、目標志向性尺度と抑うつ傾向尺度の平均値及び標準偏差を算出

---

\* 自殺に関する項目を除いたのは、この項目により、被調査者が自殺企図を顕在的に意識する可能性があると考えられたためである。また、27 項目でなく、項目一全体相関の高い項目のみを用いたのは、被調査者の負担を考慮してのことである。

\*\* 使用した項目は、桜井 (1995) における項目番号の 1, 3, 4, 7, 10, 11, 12, 19, 21, 22, 24, 26, 27 である。全ての項目は、桜井 (1995) の p. 22 及び p. 214 に掲載されている。



した (Table 7-6). 結果から、抑うつ傾向尺度の得点が低めであるが、各尺度に極端な得点の偏りは認められなかった。

次に、目標志向性を独立変数とし、抑うつ傾向を従属変数とする重回帰分析を行った。結果は、Figure 7-1 に示されている。

重回帰分析の結果、重回帰式は有意となった ( $F(3, 199) = 13.63$ ,  $p < .01$ )。標準偏回帰係数を検討してみると、本研究の仮説通り、経験・成長目標及び評価-接近目標からは負の有意なパスが、そして、評価-回避目標からは正の有意なパスが示された\*。すなわち、友人関係において経験の獲得や自己の成長に関心を示す生徒と、良い評価に関心を示す生徒は、抑うつ傾向が低いことが示された。友人関係で悪い評価に関心を示す生徒は、抑うつ傾向が高いことが示された。

## 第2項 学年・男女別の検討 [研究2-2]

### 目的

本研究では、学年・男女別に「友人関係における目標志向性→抑うつ傾向」という関係を、重回帰分析により検討する。

### 方法

被調査者 群馬県内の公立 A・B・C・D 中学校、栃木県内の公立 D 中学校、茨城県内の公立 A 中学校の1年生 256名 (男 124名, 女 132名), 2

---

\* 3つの目標間に相関が示され、多重共線性の問題が考えられたため、各目標の得点として因子得点を用いて重回帰分析を行った。その結果、尺度得点を用いた場合とほぼ同様の結果が得られた。即ち、抑うつ傾向に対して、経験・成長目標と評価-接近目標からは負の有意なパス (それぞれ、 $\beta = -.33$ ,  $p < .01$ ;  $\beta = -.22$ ,  $p < .01$ )、評価-回避目標からは正の有意なパス ( $\beta = .13$ ,  $p < .05$ ) が示された。

Table 7-6 友人関係における目標志向性尺度及び抑うつ傾向尺度の平均値(*M*)と標準偏差(*SD*)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
経験・成長目標	28.37	5.51
評価－接近目標	19.74	4.36
評価－回避目標	19.68	4.66
抑うつ傾向	19.17	4.43

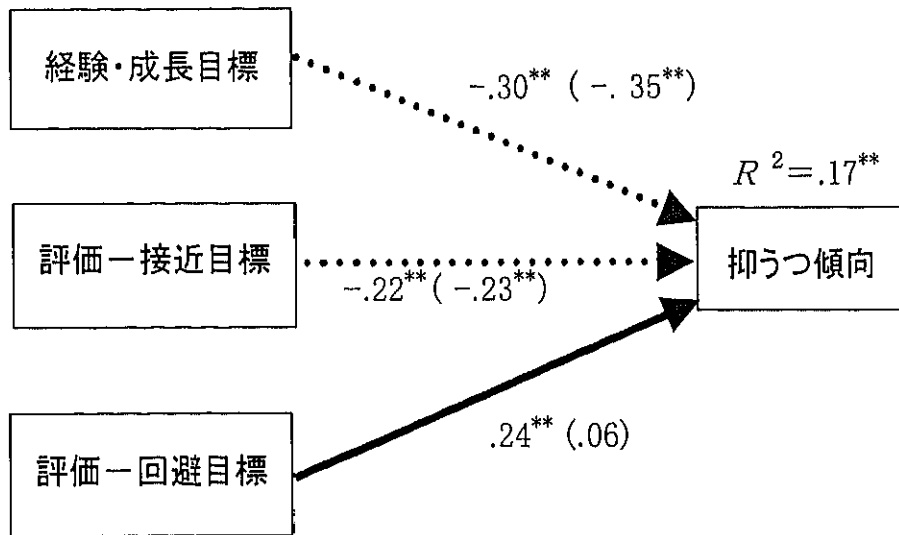


Figure 7-1 「友人関係における目標志向性→抑うつ傾向」の重回帰分析の結果

注) 数値は標準偏回帰係数を表す. ただし, ( )内の数値は相関係数を表す.

\*\*  $p < .01$ .  $N = 203$ .

年生 275 名（男 137 名，女 134 名，不明 4 名），3 年生 171 名（男 68 名，女 98 名，不明 5 名），合計 702 名。なお，群馬県内の公立 D 中学校の生徒は，研究 10 と重複する。

**調査時期** 2001 年 3 月上旬，2001 年 12 月上旬，2002 年 3 月上旬。

**質問紙** 目標志向性尺度：研究 1 において作成された尺度を用いた。

抑うつ傾向尺度：桜井（1995）による CDI 日本語版の項目一全体相関の高い 13 項目を用いた（用いた項目は研究 2-1 と同じである。以下の研究においても同じである）。

**手続き** 担任教師によってクラス毎に集団で実施された。

### 結果と考察

学年別，男女別に，目標志向性を独立変数とし，抑うつ傾向を従属変数とする重回帰分析を行った。結果は，Table 7-7 に示されている。

重回帰分析の結果，重回帰式はそれぞれ有意となった（1 年生，2 年生，3 年生，男子，女子の順に， $F(3, 252) = 10.33, p < .01$ ； $F(3, 271) = 9.29, p < .01$ ； $F(3, 167) = 6.08, p < .01$ ； $F(3, 325) = 14.59, p < .01$ ； $F(3, 360) = 10.94, p < .01$ ）。

標準偏回帰係数を検討してみると，3 つの目標と抑うつ傾向との関係は，学年・男女を込みにした結果とほぼ同様の結果が得られた。

以上の結果から，3 つの目標と抑うつ傾向との関係に，学年差・性差はないものと考えられる。

Table 7-7 「友人関係における目標志向性→抑うつ傾向」の学年・男女別の結果

	抑うつ傾向				
	1年 (N=256)	2年 (N=275)	3年 (N=171)	男子 (N=329)	女子 (N=364)
経験・成長目標	-.19 ** (-.22 **)	-.12 + (-.14 * )	-.18 * (-.25 **)	-.17 ** (-.23 **)	-.15 ** (-.18 **)
評価-接近目標	-.16 * (-.06 )	-.21 ** (-.09 )	-.22 * (-.18 * )	-.26 ** (-.17 **)	-.16 * (-.06 )
評価-回避目標	.31 ** (.19 **)	.32 ** (.18 **)	.22 * (.07 )	.30 ** (.12 * )	.28 ** (.18 **)
重相関係数(R)	.33 **	.31 **	.31 **	.35 **	.29 **

注) 数値は標準偏回帰係数を表す。ただし、( )内の数値は相関係数を表す。

+  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .

### 第3節 友人関係における目標志向性と自尊心との交互作用が抑うつ傾向に及ぼす影響 [研究3]

#### 目的

Dweck & Leggett (1988) の理論においては、評価目標をもつ場合でも、特に自己に対する自信が低い時に抑うつ傾向が生じやすいと仮定されている(第1部第5章参照)。

Erdley et al. (1997) の研究においては、この仮説が支持されなかった。評価目標を、評価一接近目標と評価一回避目標とに区別した場合においても、自己への自信との交互作用が抑うつ傾向にどのように影響するかを検討する必要がある。

そこで本研究では、評価一接近目標及び評価一回避目標が、自己への自信と交互作用して抑うつ傾向を予測するかどうかを検討する。自己への自信としては、自尊心を取り上げて検討する。

#### 方法

**被調査者** 群馬県内の公立 A・B 中学校の1年生122名(男子70名, 女子52名), 2年生128名(男子61名, 女子64名, 不明3名), 3年生27名(男子9名, 女子18名), 合計277名。なお, 被調査者は, 研究2-2における群馬県内の公立 A・B 中学校の被調査者と同じである。

**調査時期** 2001年12月上旬。

**質問紙** **目標志向性尺度** : 研究1において作成された尺度を用いた。

**自尊心尺度** : 山本・松井・山成(1982)の尺度を用いた。項目は、「少なくとも人並みには価値のある人間である」、「自分に対して肯定的である」など、10項目で構成されている。評定は、「あてはまらない」(1点),

「ややあてはまらない」(2点),「どちらともいえない」(3点),「ややあてはまる」(4点),「あてはまる」(5点)の5件法で求めた。

抑うつ傾向尺度：研究2-1と同じであった。

手続き 担任教師によりクラス毎に集団で実施された。

### 結果と考察

まず、分析に先立ち、各尺度の平均値・標準偏差と、尺度間の相関係数を求めた。結果はTable 7-8に示されている。平均値及び標準偏差の結果から、各尺度に得点の偏りは認められなかった。

次に、評価-接近目標及び評価-回避目標と自尊心との交互作用を検討するために、抑うつ傾向を従属変数として、独立変数として、第1ステップに評価-接近目標、評価-回避目標、自尊心を投入し、第2ステップに評価-接近目標と自尊心との交互作用、評価-回避目標と自尊心との交互作用を投入する、階層的重回帰分析を行った(Table 7-9)。

分析の結果、第1ステップの効果が有意であったが、第2ステップの交互作用効果は有意でなかった( $R^2$ 変化量=.00, *n. s.*)。

結果から、評価-接近目標ないし評価-回避目標と自尊心とが交互作用して抑うつ傾向を予測することはなかった。すなわち、評価-接近目標ないし評価-回避目標の高い者が、自尊心の高低により抑うつ傾向が低まったり高まったりするという結果は示されなかった。従って、評価-接近目標及び評価-回避目標は、それぞれ単独で抑うつ傾向に影響していると考えられる。

Table 7-8 各尺度の平均(M)及び標準偏差(SD)と尺度間の相関

	<i>M</i>	<i>SD</i>	②	③	④
① 評価-接近目標	19.18	4.85	.50 **	.00	-.06
② 評価-回避目標	19.70	4.53	—	-.27 **	.24 **
③ 自尊心	29.65	6.85		—	-.54 **
④ 抑うつ傾向	19.36	4.37			—

注) \*\*  $p < .01$ .  $N = 277$ .



Table 7-9 階層的重回帰分析の結果

投入順序	投入した変数	$R^2$ の変化	F値の変化	Beta	Betaの有 意性検定(t値)
1	主効果	.32 **	42.34 **		
	評価-接近目標			-.16	-2.66 **
	評価-回避目標			.19	3.18 **
	自尊心			-.49	-9.24 **
2	交互作用	.00	.45		
	評価-接近目標× 自尊心			.30	.94
	評価-回避目標× 自尊心			-.18	-.62

注) 従属変数は抑うつ傾向である。 \*\*  $p < .01$ .  $N = 277$ .

#### 第4節 友人関係における目標志向性と他の抑うつ傾向の素因（原因帰属スタイル）との抑うつ傾向の予測力の比較 [研究4]

##### 目的

研究4では、友人関係における目標志向性が、他の抑うつ傾向の素因と比較して、どの程度抑うつ傾向の予測力があるかを検討することで、目標志向性から抑うつ傾向を予測することの有効性を検討する。

他の抑うつ傾向の素因としては、抑うつ傾向の重要な素因の1つであり、小・中学生を対象とした先行研究において検討されることが多い（黒田・桜井，2001）、原因帰属スタイルを取り上げて検討する。特に、絶望感理論（Alloy et al., 1988；第1部第2章第1項を参照のこと）において、抑うつ傾向の発生に影響すると仮定されている、ネガティブな出来事に対する原因帰属スタイルと目標志向性との予測力を比較する。

##### 方法

**被調査者** 栃木県内の公立B・C中学校の1年生93名（男子41名，女子52名），2年生60名（男子30名，女子30名），合計153名。なお，被調査者の一部は，研究5と重複する。

**調査時期** 1999年10月上旬，及び11月上旬。

**質問紙** 目標志向性尺度：研究1において作成された尺度を用いた。

原因帰属スタイル尺度：樋口・鎌原・大塚（1983）により作成された，友人関係における原因帰属スタイルを測定する尺度を利用した。この尺度は，友人関係での5つのネガティブな出来事（例えば「あなたが友達にいじわるをされました」）vs. 5つのポジティブな出来事（例えば「あなたは友達に親切にされました」）と，その出来事の考えられる5つの原

因で構成されている。5つの原因は、①努力（例えば「いじわるをされないよう努力しなかったから」vs.「親切にされるよう努力したから」）、②自分の性格（「自分の性格が悪いから」vs.「自分の性格が良いから」）、③印象（「知らない間にその友達に悪い感じを与えたから」vs.「知らない間にその友達に良い感じを与えたから」）、④相手の性格（「相手の性格が悪いから」vs.「相手の性格が良いから」）、⑤運（「運が悪かったから」vs.「運が良かったから」）で構成されている。これらの原因について、樋口他（1983）による分類を参考にしながら、絶望感理論における原因帰属の次元に沿って再分類してみると、①努力は「不安定的で特殊的な」次元、②自分の性格は「安定的で全般的な」次元、③印象は「不安定的で特殊的な」次元、④相手の性格は「安定的で特殊的な」次元、⑤運は「不安定的で特殊的な」次元であると考えられる。

被調査者には、上の10の出来事が起こったと仮定させ、考えられる5つの原因それぞれに対して、「そう思わない」（1点）、「ややそう思わない」（2点）、「どちらでもない」（3点）、「ややそう思う」（4点）、「そう思う」（5点）の5件法で回答させた。

抑うつ傾向尺度：研究2—1と同じ13項目であった。

手続き 担任教師によってクラス毎に集団で実施された。

## 結果と考察

まず、各尺度の平均値及び標準偏差と、尺度間の相関係数を求めた。結果はTable 7—10に示されている。平均値と標準偏差の結果から、ポジティブな場面における性格帰属、ポジティブな場面及びネガティブな場面における運帰属、ネガティブな場面における友人帰属、そして、抑うつ傾向の得点が、それぞれ低めであったが、極端な得点の偏りは認め

Table 7-10 各尺度の平均値(M)・標準偏差(SD)と尺度間の相関係数

	M	SD	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
① 経験・成長目標	28.76	5.91	.45 **	.31 **	.23 **	.22 **	.34 **	.10	-.17 *	.19 *	.26 **	.24 **	.06	-.02	-.24 **
② 評価一接近目標	19.02	4.19	-	.51 **	.27 **	.29 **	.40 **	.14 +	-.05	.24 **	.29 **	.42 **	.11	-.04	-.15 +
③ 評価一回避目標	19.46	4.41		-	.21 *	.18 *	.25 **	.12	.12	.35 **	.17 *	.23 **	.13	.17 *	.19 *
④ ポジ場面努力帰属	13.34	4.71			-	.58 **	.27 **	.04	.14 +	.70 **	.30 **	.22 **	.36 **	.20 *	-.06
⑤ ポジ場面性格帰属	11.42	4.77				-	.59 **	-.05	.03	.43 **	.17 *	.24 **	.43 **	.13	-.05
⑥ ポジ場面印象帰属	16.12	5.15					-	.14 +	.08	.26 **	.16 *	.44 **	.22 **	.08	-.17 *
⑦ ポジ場面友人帰属	20.95	3.77						-	.21 *	.08	.12	.24 **	.01	.17 *	-.08
⑧ ポジ場面運帰属	11.49	5.14							-	.19 *	.00	.10	.34 **	.67 **	.24 **
⑨ ネガ場面努力帰属	13.79	5.10								-	.41 **	.38 **	.33 **	.24 **	.13
⑩ ネガ場面性格帰属	16.78	5.48									-	.67 **	.21 **	.05	.06
⑪ ネガ場面印象帰属	17.16	5.66										-	.30 **	.08	-.02
⑫ ネガ場面友人帰属	12.03	5.17											-	.42 **	.13
⑬ ネガ場面運帰属	10.79	5.29												-	.17 *
⑭ 抑うつ傾向	18.07	4.35													-

注) +  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .  $N=153$ .

られなかった。

次に、友人関係における目標志向性、ネガティブな友人関係場面における原因帰属スタイル、ポジティブな友人関係場面における原因帰属スタイル、ネガティブな友人関係場面とポジティブな友人関係場面の原因帰属スタイルをそれぞれ独立変数として、抑うつ傾向を従属変数とする重回帰分析を行った。重回帰分析の結果、目標志向性、ポジティブな場面における原因帰属スタイル、ネガティブな場面とポジティブな場面における原因帰属スタイルから、抑うつ傾向に対する重回帰式が有意になった（順に、 $F(3, 149) = 9.67, p < .01$  ;  $F(5, 147) = 3.88, p < .01$  ;  $F(10, 142) = 2.97, p < .01$ ）。しかしながら、ネガティブな場面における原因帰属スタイルから、抑うつ傾向に対しては、重回帰式は有意とならなかった（ $F(5, 147) = 1.51, n. s.$ ）。

それぞれの重回帰分析における標準偏回帰係数を検討すると、まず、「目標志向性→抑うつ傾向」という関係については、研究2と同様に、経験・成長目標及び評価—接近目標からは負の有意なパスが、評価—回避目標からは正の有意なパスが示された（Figure 7-2）。

次に、「ポジティブな場面における原因帰属スタイル→抑うつ傾向」及び「ネガティブな場面とポジティブな場面の原因帰属スタイル→抑うつ傾向」という関係については、ポジティブな場面における運への帰属スタイルと、ネガティブな場面における努力への帰属スタイルから、抑うつ傾向に対して正の有意なパスが示された。また、ポジティブな場面における努力及び印象への帰属スタイルから抑うつ傾向に対して負のパスが示された（Figure 7-3, 7-4）。

以上の「原因帰属スタイル→抑うつ傾向」についての結果から、抑うつ絶望感理論（Alloy et al., 1988）において、抑うつ傾向に影響を

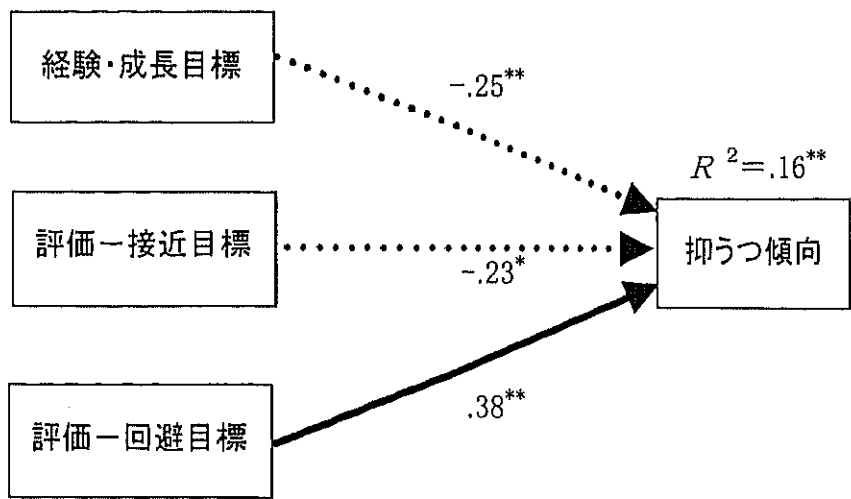


Figure 7-2 「友人関係における目標志向性→抑うつ傾向」の重回帰分析の結果  
 注) 数値は標準偏回帰係数を表す. \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .  $N = 153$ .

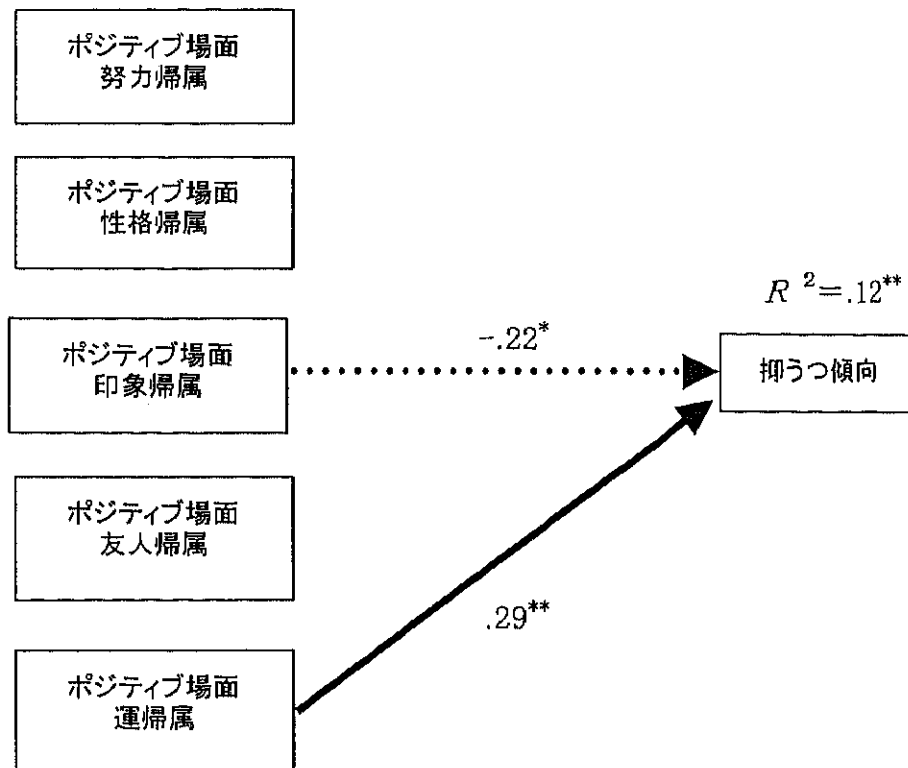


Figure 7-3 「ポジティブな場面における原因帰属スタイル→抑うつ傾向」の重回帰分析の結果

注) 数値は標準偏回帰係数を表す。\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .  $N = 153$ .

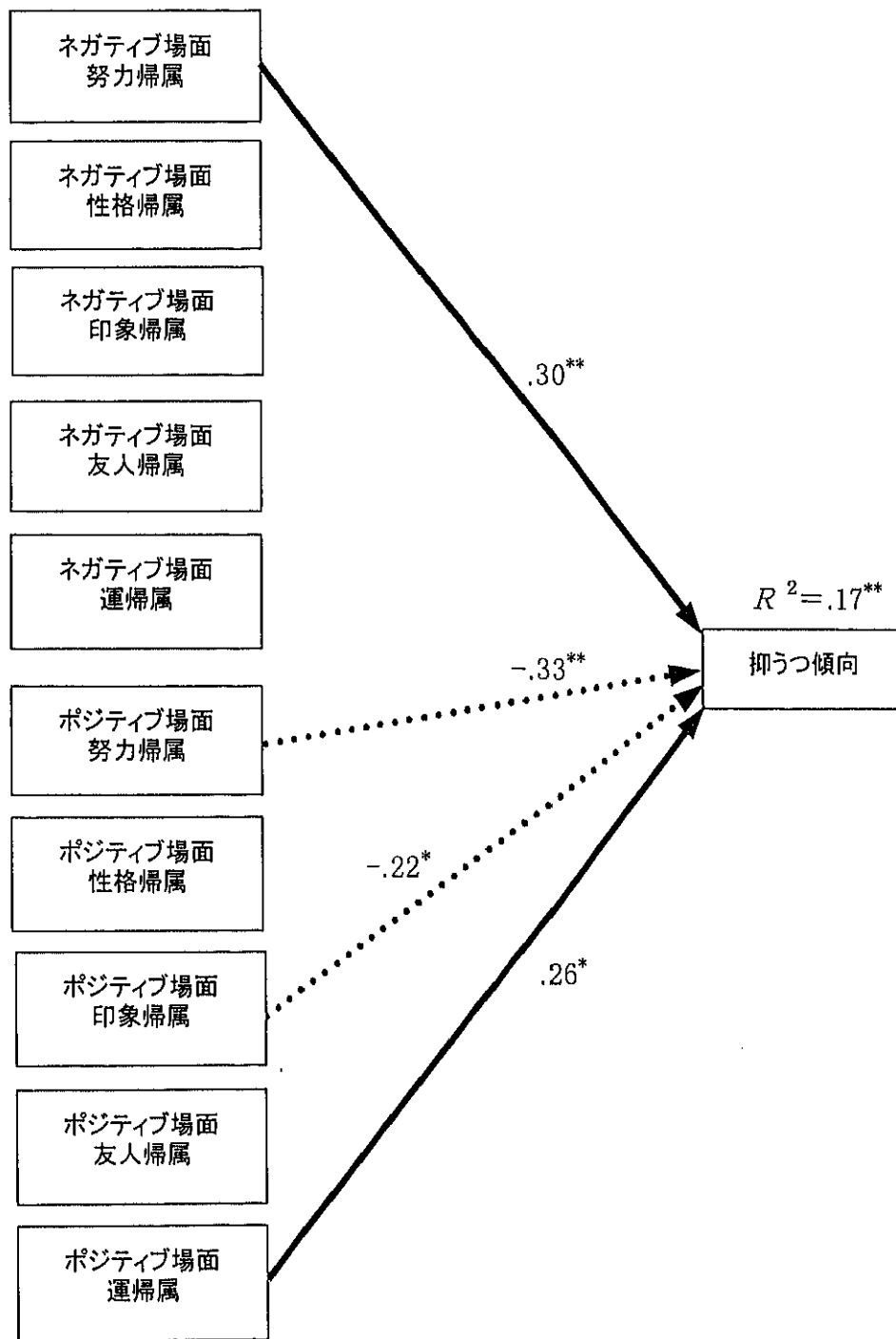


Figure 7-4 「ネガティブ及びポジティブな場面における原因帰属スタイル→抑うつ傾向」の重回帰分析の結果

注) 数値は標準偏回帰係数を表す。\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .  $N = 153$ .



与えらるゝと考ゑられてゐる、ネガティブな場面における性格（安定的・全般的要因）への帰属スタイルから抑うつ傾向への正のパスは示されなかつた。また、原因帰属スタイルと抑うつ傾向との関係についての先行研究（例ゑば、桜井、1995）と同じであつた結果は、ポジティブな場面における運（不安定的・特殊的要因）への帰属スタイルから抑うつ傾向への正のパスのみであつた。

最後に、本研究の主要な目的である、友人関係における目標志向性と原因帰属スタイルのどちらの素因が抑うつ傾向を高く予測するかを比較する。それぞれの抑うつ傾向の予測力を比較するために、上述のそれぞれの重回帰分析における調整済みの説明率（ $R^2$ ）の比較を行つた。結果を Table 7-11 に示す。

結果から、目標志向性を独立変数とした時の方が、ネガティブな場面ないしポジティブな場面の原因帰属スタイルを独立変数とした時より調整済み  $R^2$  が高く、ポジティブな場面とネガティブな場面における原因帰属スタイルとを合わせて独立変数とした場合と同じくらいの調整済み  $R^2$  であることが示された。

以上より、友人関係における目標志向性は、原因帰属スタイルと同じかそれ以上に、抑うつ傾向を予測することができることが示された。この結果から、友人関係における目標志向性から抑うつ傾向を予測することの有効性が確認されたものと考えられる。

なお、本研究では、原因帰属スタイル以外の抑うつ傾向の素因（例ゑば、抑うつスキーマや自己注目スタイル）を取り上げてゐなかつた。今後は、これらの要因も取り上げて抑うつ傾向の予測力を比較することにより、目標志向性から抑うつ傾向を予測する有効性をさらに検討する必要がある。

Table 7-11 友人関係における目標志向性と原因帰属スタイルの抑うつ傾向の予測力の比較

	(1)目標志向性	(2)ネガティブな場面の 原因帰属スタイル	(3)ポジティブな場面の 原因帰属スタイル	(2)と(3)の両方を 独立変数とした場合
抑うつ 傾向	.15 (.16**)	.05 (.02)	.09 (.12**)	.12 (.17**)

注) 数値は調整済み $R^2$ を表す。ただし、( )内の数値は $R^2$ を表す。 \*\*  $p < .01$ 、 $N = 153$ 。

## 第5節 第7章のまとめ

第7章では、友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係についての検討を中心に、研究1から研究4までの4つの研究が行われた。

まず、研究1において、これまでに作成されてこなかった友人関係における目標志向性尺度を開発した。尺度の信頼性と妥当性を検討した結果、十分な信頼性と妥当性を備えた尺度であることが示された。

次に、研究2において、研究1で作成された尺度を用いて、目標志向性と抑うつ傾向との関係を検討した。その結果、Dweck & Leggett (1988)の仮説通り、経験・成長目標は抑うつ傾向と負の関係を示し、評価一回避目標は抑うつ傾向と正の関係を示すが、Dweck & Leggettの仮説に反して(本研究の仮説通り)、評価一接近目標は抑うつ傾向と負の関係を示すことが見出された。以上の結果は、学年・男女の別を問わず示された。

そして、研究3では、Dweck & Leggettの理論においても仮定されている、評価目標と自尊心との交互作用が抑うつ傾向に及ぼす影響について検討した。結果から、Dweck & Leggettの理論に反して、評価一接近目標ないし評価一回避目標が、自尊心と交互作用して抑うつ傾向を予測することは示されず、それぞれ単独で抑うつ傾向に影響していることが示された。

最後に、研究4において、友人関係における目標志向性と、抑うつ傾向の重要な素因の1つであり、小・中学生を対象とした先行研究において検討されることが多い原因帰属スタイルとで、どちらが抑うつ傾向の予測力が高いかを比較した。その結果、目標志向性は原因帰属スタイルと同じかそれ以上の抑うつ傾向の予測力をもつことが示され、目標志向性から抑うつ傾向を予測することの有効性が確認された。

第7章に続く、第8章、第9章においては、友人関係における3つの目標と抑うつ傾向との関係が、何故上記のようになったのかを説明するために、3つの目標と抑うつ傾向との関係に介在するメカニズムについて詳細に検討する。